

福報は施に異なるなげんと説いてある。承陽大師は

其布施といふは食らざるなり、我物に非ざれども、布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず其功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし此生佗生の善種となる一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を食らず、自からが力を願つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざること無し  
と仰せられた、されば布施は天子より庶人に至るまで共通である、佛菩薩でも凡夫でも誰にでも出来るのである。古歌に

己が身を顧みずして人のため

つくすや人の勤めなるらん。

慈雲尊者の道歌に

あごりなきこゝろを代々の寶にて

つきせぬ家の守りとも見よ

とある、これが布施の心で何もむづかしいことではない加賀の千代女の句に

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

とある、誠にやさしい心懸で、慈悲は非情の草木にも及ぶべきである。松雨の妻が

我子なら伴にはつれじ今朝の雪

と讀みしは、多少の弊はあるが、子に對する親の慈悲である。すべて此心を以て行けば、人の人たる道を盡すことが出来て、天下は泰平である、歐洲戦亂の如き人生の悲惨事を惹き起すこともないであらう。

先づ理窟はこんなものであるが、餘は一二の實例を述べて本篇を結ばうと思ふ。

四 奥貫正郷の慈悲心

奥貫正郷は通稱を正助と云ひ、友山と號し、武藏國久下戸村の富農であつた。少ざ

い時より學問を好み、終に江戸に出て修行をし、學が成つて後郷里に歸つて、生徒に教授をして居つた、寛保年間偶々關東に大洪水があつた、就中武藏國入間郡が最も甚しく、民家の漂没することが數十里に亘つた、そこで正郷は直に食物を舟に載せて往つて饑餓者に與へ、病人は連れて我家に還り、自分の家に療養して遣つたものが、數百人に達した、或日正郷はその父に請うて云ふには、「あなたは平生私に儉約をせよ」と訓へて下さいましたがあれば、屹度今日の急あることを御心配なされたからでせう、それでどうぞ貯蓄してある米を出して、人々に遣つて下さいませんか」と、終に父の許可を得て、米倉を開いて飢民を賑はした、來り請ふもの市をなしたといふことである。正郷は糊を澤山拵へて、召使の中でも特に恭謹なものを擇んで接待掛とし戒めていふには、「今飢饉に苦んで居る人でも、平生から貧乏であつたのではない、それだから決して輕蔑としてはならぬぞ」と、正卿も自分で窮民に應接したが、丁度賓客を接待するやうであつたそうである、そして大人小兒の別なく一人々々米四升づゝを

與へた、やがて米倉が空虛になつたので、今度は家人に金を持たせて、四方から米を購はして、これを施與した、金も無くなると、また父に願つて田宅を抵當にして借金をして、その金で米を買つて施した、かういふ鹽梅で、前後救賑するところ、凡四十八箇村、十萬六千餘人に上つた、幕府はその篤志を賞して錢帛を給ひ、又門閭に旌表したといふことである「佛心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生を攝すと、觀無量壽經に記してあるが、正卿の如きは眞に佛心を體得した人である、大慈悲の心がなくて、こんな大布施は出來ぬのである、これは學才ある富農の布施を話したのであるが、次には名もない町人の布施を述べよう。

五 感ずべき手代の心懸け

或一人の男があつて幼年の頃から麴町邊の一豪商の許に奉公して、終に手代にまで取立てられた、克く實體に勤めて、商賣の呼吸も心得たので、主人も厚く信用をしてやがては相應の資本を出して、別株にして遣らうと思つて居た、さて淺草に大層上手

な人相観が居た、或日の事、例の手代がその家へ往つて人相を觀て貰つたところが、  
 「お前さんは運の好悪を觀て貰うどころの沙汰ぢやない、お氣の毒だが、お前さんは  
 來年の六月には死にますよ」と人相観が云つた、手代は喫驚して歸つて來て、又一二  
 箇月過ぎて、觀て貰つたが、矢張前と同じ事を云はれた、まさかとは思つたもの、  
 氣にかゝつて仕方がない、それから兎角悞謬に陥りがちであつた、元來律義者であつ  
 たから、一途に來年は死ぬることゝ觀じて、主人に暇を請うた、主人も驚いて譯を聞  
 くと、別に仔細は御座いせんが、只出家がしたいと云ふ、それでは豫て心掛けて置  
 いた金を遣らうといふと、「世捨人に金は無用で御座います、萬一入用の節はお願ひ申  
 しませう」と云つて、一錢も受けず、衣類等を賣り拂うて、小さな家を一軒買ひ、  
 托鉢をしたり、寺社を巡拜したりなどして、その日限りの身と明暮臨終を待つて居た  
 或朝例の如く早く起きて、兩國橋を渡つて行くと、二十歳前後の女が欄干に上つて合  
 掌し、あはや身を投げようとして居た、手代の道心はやにはに抱き止めて、親切に譯

を尋ねると、女は恥かしげにかう云つた、「私は越後高田在の百姓の娘で御座います、  
 兩親も相當に暮してゐますが、私は若氣の誤りについ近所の男と云ひ交はしまして、  
 國を逃げて江戸に參りました、さうして五六年その男と一所に暮しましたが、男は段  
 々身持が悪くなつて、私も色々辛い目に逢ひました、その中男は病氣に罹つて死んで  
 了いましたので、諸方から毎日々々店賃や借錢の催促をせられて、私も途方に暮れて  
 居ります、それかといつて國元へ歸る譯にも參りませず、たう／＼死ぬる覺悟を致し  
 ました」と、泣々話した、道心は委細を聽いて、女をなだめて家に還し、前の主人を訪  
 うて、五兩の金を貰つて來て女に與へて又精しい手紙を女の親許へ遣つたので、兩親  
 も大きに喜んで娘の勘當を許した、かくてその年も過ぎて翌年の六月になつたが、何  
 の變事も起らないので、さては相者に欺かれたのだと、早速主人の許に往つて始終の  
 様子を話した、主人も且つ驚き且つ怒つて、憎きはその人相観である、世の爲人の爲  
 め、この似而非者を懲らしてやらうと、道心を連れてその家に往つた、さて主人は道

心を門口に待たせて置いて内に入り、相者に面會して人相を観て貰いたいと云つた、相者はつくづくとその相を観て、「あなたは人相を観て貰いに來たのではなく、何か外に譯がありませう」と云つて、起ち上る拍子に門口の道心を見た、「如何にも不思議だまあ此方へ」と呼び入れて、「お前さんは去年の冬人相を観て上げた人だが、今まで無事でゐなされるのは、いかにも不思議だ」と云ひながら、天眼鏡に映して更に觀直して「お前さんは人の命が何かを助けたことがあるだらう」と云つた、主従は驚嘆して兩國橋一件を話した、相者は「それで解つた、その慈悲の功德で相が直つたのだ、まう心配はない」と云つて、横手を拍つて感心した。主人も大きに喜んで、道心を還俗させて、越後の女を迎へて妻せたが、末長く繁昌したといふことである、手代は勿論豪い仁者であるが、主人も平凡な商人ではなかつたと見える、而して相者が初め手代に發心の動機を與へ、後に安心を與へたのは、又一種の布施であらう。

要するに布施とは法要の際和尚様方に差上げる金錢のみの謂でなく、博愛仁慈の實

現であつて、深甚崇高な意味を含むことを知つたならば、世人は努めてこれを實踐して天地自然の大道に合致しなくてはならぬ。

### 第五章 七山禪師を追懷す

天高く氣清く、燈火漸く親むべし、一夜幽燈を掲げて、鷹峰七山和尚廣録を耽讀し、中心頗る感悟する所あり、乃ち一篇を草して自ら誠め、又以後進學人の指南に資せんと欲す。

#### 一 禪師の出家

七山禪師は寛永十三年を以て備後河北に生る、藤井玄秋の仲子なり、母は田邊氏風に三寶を奉ず、師天資寛洪安定、沈深寡黙、毀譽を懷に置かず、七歳にして佛事を掲げ世態を樂まず、父母之を奇とし、龍興の照山に投じて出家せしむ、十歳一線に従つて祝髮す。十三歳先考の墓を祭り、北堂を省す、別に臨み母撫慰して曰く、吾子が大

利を領して名位を崇うするを望まず、唯克く道業を攻め佛種を紹げば、吾願足ると、此語、千鈞の力あり師が性行其天賦に出づと雖も、又慈母の庭訓に因らずんばならず、家庭教育の忽にすべからざる以て見るべき也。

二 禪師の修業

十五歳線老が首山行篋話を拈ずるを聞き、恍然として忘れて忽ち記するが如し、東請の志萌す、翌年線老に従ひ錫を武城の金峰に挂く、師常に軟賊の行道に害あるを察し、骨鎖觀を専修して對治の法門となす、然れども尙所證の未極らざるを恐れ、十七歳高秀の文春に依る、春の門庭峻絶なりしも、師日夜奮勵力參し、一夕明月清風に坐して、忽ち身心洞脱し瞥然として開徹す、乃ち頌して曰く、

開却霜華枯木堂、  
夜深雲斷天如洗、  
引來明月一潑微涼、  
偏界無塵礙眼光、

と、是より體用無滯應機圓活なり、此境界を得て、禪門の師家と稱するに足るなり。

二十歳の時、一日一庵主來り告げて曰く、愚堂禪師は濟門の翹楚なり、公何ぞ去つて相見ざると、師平素堂師が拈提の一斑を聽けり、即ち對へて曰く「我早勘破者老漢了」と、庵主舌を吐いて去る、師が當年の意氣と自信とは、年少子弟の範となすべし。

三 禪師の革弊發願

二十八歳、常に永平の正法眼藏を閲し、嗣書面授の篇に至つて、卷を掩うて痛歎せざることなし、曰く「佛祖傳法の要は一師印證面稟手授に在り、然るに中古以來宗風地に委し代付備をなし、院に依つて嗣を換ふ、因襲弊をなすこと久し、寧ろ棄て、他派に投ぜんか、將た發願して古に復せんか」と、二念岐趨して躊躇すること久しかりしが、一旦奮然として復古の志を決す、仍て龍穩の因光總寧の丹心を歴訪して志を告ぐ、皆曰く、可なり、時の在るあらんと、師が一代の偉業は端を茲に發したり、二十九歳正法眼藏を手寫して自序を作る、曰く、

面授之卷佛道之篇、實古今眼藏獨脫玄論也。

と、又永平の忌辰に値ひ、一偈を作つて曰く、

大法興衰不<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>嗟 每逢<sub>二</sub>祖忌<sub>一</sub>濕<sub>二</sub>袈裟<sub>一</sub>

と、序と偈と爾後大願の先容となる也。

四 禪師の巡錫

時に師の道價遐邇に藉甚し、三十歳の時武府萬松の育州大會を建て、師を請じて版首とす。三十四歳武州の鳳林心眼高林、上州の普濟、備後の宗光等席を董さんことを請ふ、皆肯はず、再び腰包して祖塔を巡禮し、隱元木庵の二老に黄檗に謁し、且つ江湖の諸知識を訪ふ、皆高賓を以て待てり、三十七歳 偶 永平録十冊を得、自ら序跋を撰びて、翻刻流通す、四十三歳の秋、加州の一禪客大乘月祖の提唱を擧するを聴き、歎じて曰く「今時尚有如之人乎」と、月祖も亦師の拈古の語を傳聞し、稱して曰く「何日得東風吹入吾門來也」と師終に北遊を企つ、偈に曰く、

老來豈是愛<sub>二</sub>游蕩<sub>一</sub>、 行脚將敲最後關、

此心只許龍天識 不在間言長語間

と、既にして大乘に詣る、月祖大に喜び遇渥甚し、忽ち垂問して曰く、

道人相見時如何

師鞠躬して曰く

珊瑚枝枝撐著月

祖曰く

還記得臨濟禪事話麼

師曰く

但莫憎愛、洞然明白

祖曰く

切勿忘却

師禮して退く、後入祖傳法せらる、是歲瑩山和尚清規の序を作る。

四十四歳の春三月、靈元天皇の敕を奉じて永平に視篆す、水戸侯光圀圓通寺を以て請ずれども起たず、四十五歳天童淨祖の語録を梓行して、自ら序を作る、會月祖大乘を退く、山門支院檀越本多政長等禮を具へ師を請じて補處せしむ、九月三日終に晋山開堂す、四衆大に悦ぶ、冬戒會を啓建せしが、全く室内所傳の古儀に則れり、山門今に至る迄遵行す。

四十六歳、春永平に登りて祖塔を拜し、天童所傳の嗣書法衣を瞻禮す、尋て月祖を攝州興禪に省し、京南の禪定寺に遊んで、靈芝一莖を得たり、長五六寸ばかり、自然觀音像あり面白毛髮頗る莊嚴にして、眞に千歳の異物なり、後西院上皇之を仙洞に迎へて供養し給ひ、金枝玉葉之を慶讚し給ひ、名僧碩德之が贊辭を作る、師の光榮想ふべし、秋萬頂老師を省す、是より後春秋の交月祖を京南に省し、線老を關東に慰めて年をへだてず、世間を觀るに、人漸く青雲を得れば、忽ち舊恩を忘れて、倨傲鮮腆なるもの比々として然り、獨り師や四衆瞻仰の裡に在りて寧親奉養を怠らず、眞に一

世の儀刑たり、四十七歳重ねて山門の規約を修定し、又月祖の囑によりて永平瑩山の舊規を舉行せしが、能く古に擬し今に準じ、叢林の禮樂蔚然として一家を成せり、師永平の正法眼識誤寫謬傳多きを慨し、古刹の秘本を搜索し、大乘室内の原本と點對校定して、新に二本を寫し、永く山門に鎮す、正法の正傳する實に師が力行の功によらずんばならず、時に壽四十九なりき、翌年大乘寺を郭外二三里の地に移す、地勢清卓、四顧幽邃、行道の好區たり、今の境域即是なり、五十六歳、大乘を出で、興禪に入る、五十九歳加州の中田靜家居士、鷹峰玄光精舍を創め、師を請じて開山となす。

五 禪師の革弊

師六十一歳の時、經山玄光書を裁して曰く、

聞師久抱革宗弊之志、吾亦竊有焉、然師於東方夙有大因緣、宜躬往化真俗而運神用、吾當在畿内而坐挫群議、相俱匡扶祖道、師其熟慮而勿失時也。

と、師同氣を獲て喜に堪へず、尋て經山を訪ふ、經山亦師に過り、各懷抱を披陳し

て機々相投ず、乃ち三僧統及び官衙に聞せしが、不幸にして未だ時を得ざりき、六十  
 三歳、永平の石牛禪師に値ひて、革弊の事を勸辨し、又之を諸宰官並に大中寺主に  
 稟す、効なし、師又宗門の諸老と濫嗣の事を商確して既に之を緒言に發せしが、時縁  
 未だ稔らずして息みたれども、其意志確乎として抜けず、天を仰いて浩歎して曰く、  
 吾老矣、時不可失、乃欲憑國家威權、一掃宗門癡習之弊。

と、師尋常の手段の寸効なきを悟り、非常の手段に訴へんことを決心せり、會興聖  
 梅峰の同志戮力を得、六十五の初夏勉強して武城に赴く、首途口號に曰く、

感自拇胼至股晦  
 將勞頰舌動心灰  
 只期山澤互通氣  
 同是以虛受物來

と既にして瑠璃光寺に留り、七月十六日梅峰と共に宗弊改革を三僧統に歴達し、八月  
 四日寺社奉行阿部飛驒守正喬に哀訴して、曲に情由を陳べ、典故を條舉して祖宗の正  
 統を詳述す、然れども三僧統頑陋にして、舊例を保守し、其意見を納れざりしかば

官も亦之を採用せざりき、師此忙冗中にありて、未だ嘗て演唱を廢せず、結冬喟然と  
 して一偈を作り徒に示す。

禪林此日鎖禪關、  
 唯我抽身不等閑、  
 莫笑愚公愚若鐵、  
 折成一片欲移山、

此金鐵の意志こそ、他日素懷を遂ぐる基なりけれ。翌年守舊者鋒を列ねて博議抗論  
 せしが、二師節を持して渝らず、各宗の碩德其意を壯として援助を與へ、東叡山座  
 主公辨法親王師の語録を讀みて稱嘆し、革弊の舉を扶助し給ふ、會津侯保科正容等數  
 侯伯弟子の禮を執りて、共に外護となる、是年師雪峰廣録に題跋梓行す。

六十七歳の六月寺社奉行青山播磨守幸督略志願の要旨を了解して、心稍動きたれば  
 師機を窺ひて再び出訴せんとせしに、偶播磨守職を退きて成らず、十月二十四日、  
 瑠璃光寺の田翁甫翁二師の願輪轉軻するを憐み、官衙に唐突し、反對者と對論せんこ  
 とを請ふ、聽かれず、田翁日に趨きて哀告し、官詰百出すれども悉く解答す、吏僚



始めて諸師の至誠を會得し、希望の曙光輝き出せり、六十八歳の季春奉行阿部飛驒守二師を同職の班座に召して曰く、田翁の言を聽きて兩老の本旨を知り、法の爲に身を爲めにせざるを審にせり、委しく訟を聽きて、手判を下すべしと、頻に二師を召して證據を料檢し、二師も亦所蘊を披瀝す、官又台密の僧正濟上の宗匠を徵して佛祖嗣承の來由を磨問し、師の陳述に忒なきを察す、次に永平石牛、總持央山の兩貫首總寧嚴柳、龍穩全鐵、大中月心の三僧統以下遠州、可睡齋、武府の三寺司及び遠近の諸大刹を集めて檢問し、一々狀を供せしめ、更に二師をして供狀に就いて逐件論解せしむ、是に於て易嗣代付及び種々明白ならざる條始めて分明なり、官乃ち案を下し、元和の公條宗祖の家訓に背かざらしむ、永平僧統等靡然として首肯し、二師の所願に合して狀上す、七月四日、飛驒守復二師を招きて諭して曰く、兩老、訟ふ所眞に法門の正統なり、已に鈞聽に達せり、明斷近きに在るべしと、八月七日、將軍綱吉特に永平總持に命じて、嚴に一師印證、師資面授、佛祖の弘範濫るべからざる條目を

立て、五老中三寺社奉行連署して證明す、仍て偏く海内に令して、流弊を禁遏し正宗に復歸せしむ、嗚呼師の革新は雷に洞上に効あるのみならず、延いて全國の教界を匡救したりと云ふべし。二十八日諸官を歴訪して上謝し、衣を拂つて武城を發し、路を禪定に執りて、本師の墓を掃ひ、成功を祝告し、十月鷹峰に歸る、翌年靜家居士師の爲めに寢堂を營ひ、師扁して復古と名づけ、自ら復古道人と稱す、蓋し宗統の復古を誌すなり、是より聲譽益隆盛、縉紳侯伯請益して師資の禮を執るもの、屢指に違あらず。東山上皇亦其高德を敬聞ましくして、法要を諮詢せんとし給ひき、正徳五年六月師疾あり八月に至りて羸衰愈加はる。然れども精神健爽行道怠なし十五夜明月を詠して曰く、

露の身の消ゆる待つ間に思ひきや

今宵の月に照らされんとは

十八日夜を更めて椅に寄り、一偈を作る、

超師超佛、滿八十年、秋風捲地、孤月遊天、無幻幻兮無病病、全身入塔石中蓮、と、十九日午前七時怡然として寂す、享年八十なり。

六 内山禪師傳の後に書す

予禪師の傳を讀んで、推服措く能はざるは、其身體の強硬と精神の剛明となり、耳順の老軀を提げて、法門の爲めに奔走す、他人の容易に企及する所に非ず、殊に意志の堅牢なるに至りては、金石を透徹するの概あり、是れ一に精進力參の効たらずんばあらず。更に思ふ、人心の腐敗今日より甚しきはなく、人々其適從に迷ふ、他の宗教が淺膚の教理を擁して、而して我佛敎の範疇に闖入し、幾十萬の信徒を改宗せしむる所以のものは、其敎師の至誠熱心と健闘努力の結果にあらざらんや、實に我佛敎界は危機に瀕せり、是に於てか外他山の石を以て我玉を磨き、内山禪師の如きを龜鑑として、修養力行せば、庶くは危機を轉じて我宗風を擧揚するを得んか。古聖曰く「本立而道生」と、以て自ら誠め、又人に致す。

第六章 玄樓和尚と風外和尚

此頃北條東北帝國大學總長邸で、鐵笛倒吹の提唱を懇請せられたについて、此書の著述者玄樓禪師と、著語者風外禪師との事蹟を調べた。依つて聊かそれを述べて見よう。

一 玄樓禪師

禪師諱は奥龍、玄樓とは其號で、別に蓮華海とも稱した。九歳の時出家し、次で長壽寺齡峰の子となつた、十三歳の夏、海に航して偶颯に遭ひ、船は覆つて、溺死する者が甚多かつた、其時師は竊に思つた、「萬物の世に於けるは、丁度人が船に乗つて居るやうなものである、船に成壞あれば人に生滅があり、萬物にも各代謝がある、故に世界も亦終始がなくてはならぬ、その終始は果して何時であらう」と、之を老僧某に質問すると、「無始より始まる」との答であつた。師は重ねて「終があつて始のな

いものはありません、その無始の始は何時でせう」と云ふと、老僧は「それはお前が後日自ら悟ることがあらう」と云つた。齡峰老が嘗て「頭上鐵石。脚下氷淵。我心沒地。他見懸天。」といふ偈を書いて師に與へた。師は之を日用の鐵石として切瑩した。十九歳の時、出て、天下の宗匠に參したが、自ら考へて見ると、どの師僧方の頭腦も、大抵相似たもので、胡亂提携してゐるのだから、決して恃むに足らない、ひとり閑寂な處に隠れて、打成一片に參究するのが第一肝要だとそれから冥想三昧に入つた、或日偶日が西に傾くのを見て、慨然として謂へらく、「我はこの事について日夕汲々として、既に五年を経たが、慙慙に日を送つたら、何の日に能く透徹し去るであらうか」と。そこで石上に踞し、勇猛に辨究して、天明に達するのも知らなかつた。忽ち遠山寺の鐘の音を聞いて、豁然大悟し、乃ち偈を打していふ。

曉應ニ鐘聲ニ天地開。日輪果自ニ大東ニ來。

是何道理吾無識。不覺呵呵笑滿腮。

これは寛保三年、二十四歳の時であつた。後但馬國龍滿寺問厚の道風を聞き、直に往つて相見へ問うて曰く、「路を死蛇に逢ふ、無底の籃子に盛り持ち來る、請ふ和尚之を弄して活却せしめよ」と。問厚老は三步退いた、師が恐れる状をみると、厚老が呵々大笑した、師は「仁義道中一著を放過す」と云つて退いた、是が師勝資強の消息である。又石霜七去の話を請益して遂に大自在を得た。此後江湖の各衲を勘過したが、その鋒に當り得るものはなかつた。東遊の途次、松陰の門を過ぎ、白隱禪師に謁した、師曰く「和尚常に什麼を將て人の爲にす」と、白老膝を拊つこと一下していふ「唯々如是」師曰く「もし唯與麼ならば佛法地を掃つて滅却せしむ」、白老いふ「滅却滅却」師曰く「作麼生是れ臨濟の正法眼」白老は即ち一喝した、師曰く「鷄子新羅を過ぐ」、白老が「ただ奇特の處あり」といつたので、師は一禮して去つた。三十六歳の時、空印和尚の懇囑によつて、駿州靜居寺に住し、次で越中最勝寺、石州妙義寺、西福寺、但馬龍滿寺、宇治の興聖寺に歴住して、大に四來の學人に接した。其手段惡辣を極め

て、道の爲には毫も人情を假さなかつた、故に世間では狼玄樓と呼んで虎佛通と併稱したそうである。文化十年、九十四歳で遷化せられた。著す所鐵笛倒吹、蓮華海五分録、祖韻敬療、辨官容承、十六鐘鳴など叢林の珍と稱せられて居る。

二 風外禪師

禪師諱は本高、風外と號した。九歳生國伊勢の廣泰寺で薙染し、長じて後、遊方して十餘人の善知識に歴參した。其機鋒の穎脱なる、克く之比肩するものがない程であつた。竟に興聖寺の玄樓禪師の言下で翻身を解し、親しく其堂奥に參徹した。會高祖忌の逮夜に、玄老が「獻湯の事作麼生」と問ひかけると、師は即座に「一踢踢蹴し去る」と答へた。翌日玄老が「爾昨夜祖師を足下に掛くといふ、報恩の消息甚麼の處にある」と詰つた、師は「今日禮拜」と云つて、直に禮一拜して、その儘袖を拂つて出で去つた、眞に「見過師、堪傳授三」の概がある。

其後師大阪圓通院に請せられ、伽藍を鼎新し。又三州香積寺に移つて、大に宗風を

舉揚した時の如きは、江湖の龍象が先を争つて參叩した。師はよのつね斷崖一推手段を用ひ、他の爲に釘を抽き楔を抜いた、坦山、奕堂、鼎三、藏雲の禪伯は、皆其門下から出で、大に天桂の家風を宣揚したのである。

師が香積寺に住した時の事である、或年の夏鎌倉圓覺寺の使僧が來た。師は之を書院に延いて、頗る丁寧にもてなした。其夕方師は淋汗をした後浴衣がけに下駄を穿いて、團扇を使ひながら庭を散歩した。使僧は簾越しに之を見て、「猫ぢや猫ぢやとあつしやいませが、猫が下駄はいて來るものか」と云つた。師は知らぬ顔をしていた、翌朝使僧が出發しようとする、師は會下の大衆を山門の兩側に並立せしめ、自分は使僧の後に附いて往つた、そして使僧が今や門を出ようとする一刹那に、不意に「それ猫が」と叫んだ、使僧が喫驚して後を振向と、師は呵々として大笑した。

師は大刹に住持することを好まないで、常に「大山人山は野狐窟だ」と謂つてゐた。讃州高松藩の家老が藩主の仰を承つて、態々烏鵲樓に來て、禮を厚くして其香華地

に住することを請うた。師は固辭して應じなかつた。家老が尙も切に頼むので、師は指頭で眼の下を抑へて、「あかんべ」と云つた。流石の家老も呆れて立ち去つたさうである。

坦山師が若い時諸方の宗匠方を看破して、終に師の許に來た。師の容貌は溫柔で、一見婦女子のやうであつたから、坦師は心中私に之を謾してゐた、然るに忽ち師の一間に逢つて、通身汗流れて一語も發せなかつた、それで節を折つて之に師事して、遂に印記を受けた。後坦師は師の描いた虎を見て、「是れ恰も猫の如し、しかはあれど自ら威ありて犯すべからざるの趣あり、風外の外溫柔にして内に惡辣の手段あり、儼として犯すべからざるは、洵にこの圖の虎の如し」と評した、實に適評である、師は船子夾山の圖に題して

一曲聲高世渡歌。行人不<sub>レ</sub>到夕陽斜。紛々霜葉觸<sub>二</sub>撓子<sub>一</sub>。飛入<sub>二</sub>秋江<sub>一</sub>翻<sub>二</sub>錦波<sub>一</sub>。

といつた。師は禪燕の暇に畫をかいて樂んだが、水墨は伊孚九の趣があつて、而も

韻致の高いのはそれに超えてゐた。又彩色に妙を得てゐた、精を凝らしたものになると、老練な専門家すら下風に墮若とする位であつた。それでその寸謙尺紙でも世人は頗る珍重するのである。引化四年六月二十二日遷化せられた、時に壽六十又八。

三 附 說

玄樓禪師が齡僅に十三で、世の生滅代謝の理に氣づいたのは、其穎敏の神機を見るに足り、其時代の諸方人師の胡亂提携を勘破し、獨閑地に就いて打成一片に參究せられたのは、精進力の博大なるを知る事が出来る。後師家問厚志に對して慕直に自己の見地を問著して、證明を得たるの透脱、石霜の七去を親參實究して、悟後の修證を徹底し、路に白隱和尚を訪やて商量した消息の如きは、孰れも兄たり難く弟たり難き妙處がある。其神足風外禪師の機鋒穎脱なる、かの高祖忌速夜當日の商量こそ師勝資強の眞諦であるといはねばならぬ。而して圓覺寺使僧に對する「それ猫が」の一擲は、所謂賊馬に騎つて賊を追ふの慨があつて、猛虎の雄威を現じて居る。況んや

高松藩家老に對して、「あかんべい」の挨拶の如きは、いかにも率直で、上に王侯を見ざるの見識がある。

上來余は二老漢の行業を叙述評唱して、縷々數千言を費したが、是は時弊の慷慨する一片歌々の心から發したのである。庶幾くは今日の禪和子參玄の高士は、科學や教乘の萬能主義を捨て、愈切實に參禪修道に志を傾け、大に宗乘を徹底して、以て人天の爲に法雨を灑がんことを祈禱々々。

### 第七章 禪的處世法

#### 一 手が一日の行持

雪の朝にも五時には必ず蓆より起き出で、冷水もて嗽、洗面を洗ひ、法衣の襟を整へて朝課讀經し、さて朝食臺に坐す。卓に上るものは乳糜一合、麥飯二杯、蔬菜の淡泊なるものを副ふるばかりである、點心、藥石も亦斯の如し、一年三百六十五日校舎

内に起臥して居る間はさしたる變化はない。元來酒を嗜まず、煙草を燻らすこともなく、毎日七時に至れば、教場に出て自ら鞭を乗りて諸生を誨へ、または教務を監督するのである。午後には寮に退きて圖書を繕ひ、賓客あれば出で、接す、夜は或は稿を草し或は毫を揮ひて後、坐禪すること約一時間、九時若しくは十時に開枕するのが、衲の日常の行事である。謂はゞ禪的の處世法である。

#### 二 平常心是道の垂訓

衲は曹洞宗専門本校七級の時、管長の命を承けて、埼玉縣専門支校の教師になつて任地に赴いたのは、齡二十七歳の時である、居ること四年、麻布大學林を卒業した後、永平總持兩大本山の僧堂に入つて、専ら坐禪修行をしたのであるが、明治二十一年以來は、愛知、千葉、宮城、山形なる宗門の中學林に職を奉じ、三十五年學制改革せられ、東京には曹洞宗大學と高等學林とを置き、全國を四學區に劃して、四箇中學林を設くるに當り、名古屋第三中學林長に任ぜられ、翌年東京第一中學林に轉じ、

四十二年任滿ちて冠を掛けし後は、只管參禪辨道せむと志し、其年又も仙臺中學林長に拜せられて今日に至つたのである。

されば納が六十路あまりの大方は、いと單調なる學校生活にのみ送つた、随つて世の耳目を聳かすべき料としては何もないのである、けれども自信教人信の道にいそしみて、これが沙門の使命と考へ、「平常心是道」てん遺訓は寤寐膽に銘し、日常の行事は數十年一貫して須臾も怠つた事はない、只此一事聊か禪的處世の實踐として人に語るを得るのである。

納は青年時代には、南風に際して頭痛を感ずることが暫々あつた。然るに老來頗る頑健にして、一度胃病とマラリヤ熱とを患つた外は、二豎も襲ひ來らず、一簞の食一瓢の飲、其樂を改めず、身を孤山の嵐の底に宿して心を淨域の雲の外に澄ますなど云はむには、おこがましけれども、畢竟攝生と坐禪の効果であると思ふ。

本來無一物なれば、財寶黃白の累も起らず、身は六塵の巷に出入すれども心は名利の谷と交渉せざれば、これも健康を保てる一因となるであらう。「平常心是道」辭は卑近なれども意味は頗る深い。是ぞ納が少壯時代より禪的處世法の坐右の銘とするところである。

三 處世術に拙き東北人

仍て納は目下當仙臺市に居る關係上、一言我が東北人に參禪の急を述べやうと思ふ。東北人が今後政治上、社會上如何程の重きを天下に爲すかは頗る疑問である。近頃二三の大臣が出たりとて俄かに東北人可畏と云ふは、未だ容易に首肯し得ざるの言である、之を現時の政黨者流に見、東北出身の軍人、教育家、實業家、文學者等に見るに、今後社會の勢力と成りさうな人物は殆んど見當らぬのである、特に我が佛敎界の狀態に至りては、益々人物の拂底を見るのである、帝國大學其他世間の學校の成績を聞くに、東北人は概して頭腦鈍く殊に數理思想乏しく凡てに於て成績が不良であると、又佛敎各宗の敎育界に於て見るも、東北出身の學生は成績極端に優等なるもの

一二あれども、概して劣等の者が多い。關東中央西南人は極端に善きものなき代りに亦極端に劣等のもなく、概して平均し中等に位して居るのである。然るに社會の秩序井然たる現代にては社會の大勢は中等人種に支配せらるゝ事となる。而して東北人種中二三の最優等なる人々も、他日社會に出るに至つては、學校と實社會とは自ら異り、學校の優等生も實社會に出ては劣敗者たるも珍らしくない、何となれば東北人は概して處世術に於て天下の最劣等者である、現今既に斯の如くなりせば、今後生存競争の劇甚なるに隨つて、益々甚しく極端に陥るやも知れぬのである、思へば浩歎に堪へぬ次第である。

四 救済の方法如何

之を救済する方法如何、政治教育實業家の方面は今の所論に非ざるを以て且く措き、吾人宗教家として東北人を發揮せしむるの方法如何。是れ當面の緊急問題である。東北人の頭腦は數學的思想に乏しきが故に學者たるに適せず、又、言語缺舌蠻音にし

て説教演説師たるに適せず、但文學者として文壇に立たば或は成功するかも知れぬ、それも天才に屬する事であつて今の所論ではない。吾人僧侶として學者にも成れず、布道家にも成れず、事務家にも成れず、文學者にも成れざるものとすれば、如何なる方面に發展せば、吾人の目的を達する事が出來やう、曰く禪を修するの一事である。東北人は實に坐禪的人種である。禪は利人鈍者を選ばざる法門ではあるが、比較的鈍重的人に適する法門である。聰明利根なる阿難尊者や神秀上座よりも、稍鈍重なる迦葉尊者や碓坊六祖の方が迅速に大悟徹底したてはないか、且つ宗教的生命は聰明利根なる世智辨才ハイカラ的なるよりは鈍重温厚寡黙なる蠻的性格の方に存するのである。

五 只管に打坐せよ

彼の達磨大師を見よ、佛祖嫡傳の大法を支那へ傳へんとて態々渡來せられ乍ら、布教傳道すべき機會は充二分に有り乍らも、帝王の信仰をも退けて、以て毫も布教傳道



せず、黙々として九年面壁した、衲は達磨大師のこの一事、實に東北式であると謂ひたい。而も九年面壁の方が譯經よりも説法よりも、遙かに大なる効果を奏したてはないか。法然上人は一代の智者と稱せられしに拘はらず、最後信心決定の曉には自ら「一文不知の尼入道」となつて念佛宗を開かれた。乃ち兀々打坐三昧の消息と一致するではないか。

されば東北人特に佛教家は先づ其自己の性格に適當せる坐禪を修し、只管打坐、大悟徹底するに至らば、恰も璞玉を磨せると一般、東北佛教界に眞の光明となるや勿論である。是れ豈に東北人のみではない、一般の人々も予が如上の婆言に省みて、兀々端坐裡に殺活自由の機用を得られんとを望むのである。

## 第八章 禪の教理と儒教

一

宋の儒學は特に道學或は性理學と稱し、天理人性を攷察するを目的として、頗る哲學的傾向を帯びて居ることは、漢唐間の訓詁學や清朝の考證學には見られぬ特色である。元明の儒學も之を紹介したものに過ぎぬ。是れ畢竟三代の儒者が禪宗の影響を受け、其内觀見性の工夫を應用して、儒學の眞髓を發闡せんと試みた結果である。故に三代の儒學が禪宗の教理と相合ふものあるは自然の數である、茲には宋以前の儒學と禪の教理とを對照して、其契合點を研究して見やうと思ふ。

二

宗教とは神なるものと、人との實際的究竟關係である。故に宗教には主體即ち人と、客觀即ち神なるものとの二要素を具備しなければならぬ。孰れの宗教を見ても必ずこの二要素を具備して居る、佛教の佛陀、基督教の神、皆所謂神なるものに外ならぬ。

禪は梵語、禪那の略語で、譯して靜慮と云ふ、即ち念慮を安靜にして眞理を思惟し、

高傑なる性情を鑄冶し、光風霽月の心地を開拓せんとする宗教的訓練である。この禪定を立脚として成立した宗旨が即ち我が禪宗であるのである。

儒とは周官に「以道得民」と釋してある、又周の官制に師儒といふ地方官があつて、道藝を士民に教ゆることを掌つて居た。故に儒と道とは離るべからざるもので、此道を説明すれば儒學の性質は自ら明瞭になるのである。孔子は儒學を大成した聖人である、が其語録とも見るべき論語には道と云ふ字が續々現はれて居る、能く之を玩味するに其意味は一樣でないが、大略二種に分類することが出来ると思ふ。即ち倫理的原理と政治的原理とである。たとへば

子謂子産有君子之道四焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也義（公冶長）  
此道は倫理的原理である。

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教（中庸）  
之も同部類に屬すべきであらう。

孔子曰天下有禮樂征伐自天子出天下無道則禮樂征伐自諸侯出（季氏）  
此道は政治的原理である。蓋し孔子は政治の根柢を倫理に置く者であるから、二者決して相扞格することはないのである。故に儒の道は倫理政治的原理と云へると思ふ、之を具象的に詳言すると、大學の三綱領が即是である。

大學之道在明明徳、在親民、在止於至善、  
朱子曰く

明徳者人之所得乎天而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也  
と、されば明明徳は自利で倫理的である、親民の親を程子は當作新と訂正し、朱子之を承けて曰く

新者革其舊之謂也、言既自明其明徳、又當推以及人、使有以去其舊染之汗也

と、されば親民は政治的で利他に當る、而して二者圓滿至上の點に到達しなければな

らぬのである、此三綱領を更に細説したのが次の八條目で、即ち

古之欲明<sub>レ</sub>明德於天下<sub>一</sub>者先治<sub>二</sub>其國<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>其國<sub>一</sub>者先齊<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>（以上は親民）、欲<sub>レ</sub>齊<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>者先修<sub>二</sub>其身<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>其身<sub>一</sub>者先正<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>正<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>者先誠<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>誠<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>者先致<sub>二</sub>其知<sub>一</sub>、致<sub>レ</sub>知在<sub>レ</sub>格<sub>レ</sub>物（以上は明明）

是であるが、其教ふる所は現實的常識的で、教理信條乃至福音などは那邊にも見られぬ又神とか佛とかいふ信仰崇拜の對象即ち客體も立て、居ない。故に儒學は宗教にあらずして、倫理を根柢として政治の本源を説明した一種經世の學である、かの道學を大成した朱子すら、

不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>之民生日用彝倫之外<sub>一</sub>

と斷言して居るのを觀ても、儒學は到底宗教でない。

三

かく禪と儒とは全然立脚地を異にし、從つて理想も違つて居つて、其間に踰越すべ

からざる鴻溝の存することは、到底争はれぬのであるが、併乍兩者は徹頭徹尾柄鑿相容れぬであらうか。昔者唐韓退之が憲宗皇帝に上つた諫佛骨表に、佛は元來夷狄の人、中國とは言語も衣服も異り、口先王の法言を言はず、身先王の法服を服せず、君臣の義父子の情を知らず。と喝破してある。文章こそ實に堂々たるものであるが、精神は全く空疎で、毫も佛敎の眞髓に觸れて居らぬ、即ち韓退之は佛敎の門外漢であつて、其畏友柳子厚の與韓愈書に、佛敎は易論語に合するものがある、故に唯外形のみを見て之を排斥するは、猶石の玉を韞むを知らざるが如しとある。これこそ穩當な議論と思ふ。

四

儒學に對して道家の學がある、是も畢竟哲學的倫理説で宗教ではないが、理想的抽象的で世界觀人生觀も具備し、餘程宗教に近い、故に後漢の世、佛敎傳來するや早くも其刺戟を受けて、魏晉の際には經を作り觀を設けて終に道教を形成した。尋で南北

朝の頃諸教調和を企つる者起り、張融顧歡譚峭は儒佛の融合を圖り、王通は儒道佛の混和を試み五代の際には、陳搏三教を考察して一箇の學説を開顯した、宋の道學は之を紹述したものである。我邦にても、聖德太子は神儒佛三教の併存を是認して居られたらしい、弘法大師の三教指歸には三教調和の傾向が現れて居る、後世の本地垂迹説兩部習名惟一神道等は、神佛二教の統合で、垂加神道は神儒を調和したものであつた。蓋し此等の企圖は、教學發展の過程に於て、何人も一度は想到すべきことであらうが凡そ宗教や學術には、各固有の基礎理想歴史があるから、強て牽合附會すべきでない、我道元禪師は「佛敎は佛敎によつて批判せざるべからず」と云はれた。卓見一世を睥睨するの概がある。但し今はしばらく方便門に下つて、儒佛兩敎の契合點を擧げて見やうと思ふ。

五

佛とは何ぞや、觀無量壽經に曰く、

佛心者大慈悲是、以無緣慈攝諸衆生

即ち佛陀は慈悲心の結晶ともいふべきで、慈悲は佛敎に於て頗る大切なものである、然らば儒學に於て之に匹敵するものありや否や、曾子は「夫子之道忠恕而已矣」（論語里仁）といひ、朱子は理といひ、全祖望は誠といひ、伊藤仁齋、荻生徂徠は仁といひ、或は中庸といひ禮とする説もある、孰れも一應の理窟は立つのであるが、孔子が漫に門弟に許さず、又自ら居らなかつたのは仁である、故に仁は儒學の最も重要な徳らしい。然らば仁とは何であるか、蟹江博士は之を「利澤、重厚、慈愛、忠恕、克己」の五要素に分析し、且つ慈愛を以て本義とし他は之より派生したものと見て居る。伊藤仁齋曰く、

慈愛之徳遠近内外無所不至之謂仁

此説にして謬なからんか、儒佛の主張は餘程相近づくであらう。更に觀察するに、佛敎の慈悲は自他平等である、大般涅槃經に曰く、

自未<sup>レ</sup>得度先度<sup>レ</sup>他

正法眼藏は擴充して曰く、

菩提心を發すといふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり。故に自他平等の中にも、利他が重くなつて居る、去つて儒學の仁を檢するに、

夫仁者己欲<sup>レ</sup>立而立<sup>レ</sup>人、己欲達而達<sup>レ</sup>人(論語雍也)

志士仁人無<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>主以害<sup>レ</sup>仁、有<sup>レ</sup>殺<sup>レ</sup>身以成<sup>レ</sup>仁(論語衛靈公)

とあつて、同じく利他の方が重くなつて居る、故に慈悲と仁とは愈接近して來る。

然るに他の一方に見逃すべからざる差異點がある、佛敎では「以<sup>レ</sup>無緣慈攝<sup>レ</sup>諸衆生」といふから、平等無差別の愛たるに異論はない。然るに儒學に於ては二種の愛を説いて居る。即ち

汎愛<sup>レ</sup>衆(論語學而)

是は平等の愛である。

惟仁者能好<sup>レ</sup>人能惡<sup>レ</sup>人(論語里仁)

以<sup>レ</sup>直報<sup>レ</sup>怨、以<sup>レ</sup>德報<sup>レ</sup>德(論語憲問)

是は差別の愛である、故に平等の中に差別あり、差別の間に平等あり、所謂差等の愛である。

六

佛敎では増一阿含經に五戒を説く、「不殺生、不偷盜、不邪淫、不飲酒、不妄語」即ち是で、罪惡を豫防する消極的道德律である。儒學には董仲舒の主唱した仁義禮智信の五常があつて人生日常實踐道德の標準をなして居る。卒然之に臨むと、其間何等の交渉をも見出さないのであるが、之を對照調和したのは、仁王經疏著者の卓見である。惜い哉其對照には當らぬ節があるかと思ふので、聊管見を述べて見る。

(一)不殺生と仁。人若於<sup>レ</sup>彼衆生<sup>レ</sup>妄加<sup>レ</sup>殺害<sup>レ</sup>而奪<sup>レ</sup>其命、死墮<sup>レ</sup>惡道、或生<sup>レ</sup>人中<sup>レ</sup>亦壽命短促、若不<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>是事<sup>レ</sup>一名<sup>レ</sup>不殺戒<sup>レ</sup>慈愛好生曰<sup>レ</sup>仁云云、仁則不殺、故以<sup>レ</sup>不殺<sup>レ</sup>

配仁也、これに異見はない。

(二)不偷盜と義。…人若於有主物不與而竊取、死墮惡道、或生人中亦受貧乏報。若不作是事一名不偷盜戒。仁王經疏は之に智を配して居るが適切でない、余は義を當てたいのである、何者義者宜也、制事合宜曰義、即ち正理を確守して一身の利害を顧慮することであるから、不偷盜に吻合する。

(三)不邪淫と禮。…人若姪佚無度、好犯他人妻妾、死墮惡道、或生人中妻妾亦不貞良、若不作是事一名不邪淫戒。疏には義を配してある、固より當らぬこともあるまいが、禮の方が更に妥當である、處事有則曰禮、王弼の説に禮以敬爲主とあり、朱子は禮必以忠信爲質といふ、事を處するに恭敬忠信を標準とせば、他人の貞操を汚すやうなことは、決してないのである。

(四)不飲酒と智。…人若飲酒則縱逸狂悖昏亂愚癡無有智慧、若不飲者是名不飲酒戒。疏には禮を當てゝある、操行上からいはい、作法の禮に當るかも知れぬが、

性情の上から見ると不當である、邪正明了曰智、即ち昏亂愚癡の反對であるから、余は智を配した所以である。

(五)不妄語と信。…人若妄造虚言隱覆實事誑惑衆聽、死墮惡道、或生人中亦口氣臭惡爲人所憎、若不作是事一名不妄語戒、眞實不欺曰信云々、信則不妄語也、故以不妄語配信也、

聖賢の所見は東西同揆で、儒佛相悖らざる一證左とすることが出来る。

七

世界の原質或は本體の討究は、古來宗教哲學の重要な任務であつた、哲學の方面は絮説の暇がないから略して、宗教の方面を通觀するに波羅門教は梵天を以て一切衆生の父とし、ヘブライの一神教はヤーベ(即ちエホバ)を宇宙の主宰とし、波斯の拜火教はオルムヅド及アirimanの二神を立て、二元論を唱へ、基督教はゴッドを天父とし、又回教はアラを天主とする一元論である。

佛教の世界觀を視ふに、大乘起信論に曰く

心眞如者即是一法界大總相法門體、所謂心性不生不滅、一切諸法唯依妄念而有

差別

即ち不生滅の眞如を宇宙の實體とする唯心論的一元論である、此眞如が因となり、根本無明が縁となつて、眞如妄念を和合した附黎耶識を現出して、現象の方面に一轉し、根本無明が因となり、妄境界が縁となつて、阿黎耶識から諸現象を發出する、故に一切諸法唯依妄念而有差別と斷定したのである。

儒學は元來現實的な經世學であるから、科學的省察、抽象的思索を缺いて居る、然らば生死問題の如きものには全然無交渉であるかといふに、幸に一部の易經があつて、聊か吾人に教ふる所がある、繫辭傳に曰く

精氣爲物、游魂爲變

精は有質の粹にして陰物、氣は無形の師にして陽物である、此陰陽の二物相交合する

と物となる、物とは生の名、陽の道であつて、神靈之に寓す、然るに精氣が分離すると魂氣遊散す魂とは精の靈なるもので、游魂とは精氣舍を離れ去るの名、死の道を示すのである。乍併物に寓した神靈は不生不滅であるから、機に臨んで能く變化する。これが儒學の世界觀で、陰陽の二大動力の離合が萬象生滅の原因をなすと説く、即ち二元論である。然るに陰陽を主宰統一するものがある、即ち神であつて、繫辭傳に陰陽不測之謂神と説いて居る。これが佛教の眞如に對照せらるべきものではあるまいか。

八

佛教では因果業報を説く、即ち善因から善果を生じ、惡因から惡果を生ずるの謂で釋尊の教法中にも因果經の一篇があつて、實例を引いて三世因果の道理が詳説してある。實行問題として頗る有效なものである、俱舍論などでは萬法の起伏も此法則に基くと説いて居る、要するに因果業報の理法は佛教全部を貫申する骨子である。

儒學にも此道理を忽諸に附して居ない、

積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃（易經繫辭傳）

惟上帝不常、作善之降百祥、作惡之降百殃（書經伊訓）

道家の教にも同意味の箴がある

天道無親、常與善人（老子道德經、）

大織冠藤原鎌足傳に、大友皇子弘文天皇が鎌足に夢物語をなされた一齣に、此格言が引いて

ある。

朱衣老翁捧日而至、擊授皇子、忽有入從腋庭出來、便奪將去、覺而驚異、具語藤

原内大臣 歎曰、恐聖朝萬歲之後有巨猾間覺、然臣平生曰豈有如此事乎、臣聞

天道無親、惟善是輔、願大王勤修德業、災異不憂云々

鎌足は天智天皇と共に、碩學南淵請安に就いて儒學を修めた人であるが、假に老子の

語を適用して皇子を諷したものと見える、されば儒學にも因果業報を説いたことは疑

を容れぬ。

要するに宗教ならぬ儒學にも、生死問題因果業報説の如き宗教的分子が含まれて居ることに注意をせねばならぬ。

九

以上儒佛を比較し來つたが、以下儒禪の對照に移る。

佛教の中多くの宗派は、教宗として經論の文字を追ひ言句を尋ねて、教義を説き之を

信するけれども、禪宗のみは常に釋尊一代の言教のみならず、別に心印を單傳し、以

心傳心以て師資相承するのである、故に教外別傳不立文字の目がある、問佛決疑經に

曰く、

摩訶迦葉尊者因世尊、拈華瞬目、迦葉破顏微笑、世尊曰、吾有正法眼藏涅槃妙心、

付屬摩訶迦葉。

是れ教外別傳不立文字の濫觴で直指人心見性成佛の妙處である。



かゝる妙味が儒學に有りや否をや檢して見やう抑も孔子の教育法は啓發主義を採つて、注入主義を避けた、論語述而に曰く、

子曰不憤不啓不悱不發

朱子の註による、「憤者心求通而未得之意、悱者口欲言而未之貌、啓謂開其意、發謂達其辭」である、程子早く「憤悱誠意之見色辭者也、待其誠至而後告之」と又曰く「不待憤悱而發則知之不能堅固、待其憤悱而後發則沛然矣」と、詩經小雅巧言に曰ふ。

他人有レ心予付ニ度之

其意蓋し啓發に外ならぬであらう。而して孔子は啓發主義を實施するに、説教的或は講演的方法によらず、提唱的方法を採り、提撕鞭撻努力して自得せしめた、論語述而に曰く、

舉一隅不以三隅反則不復也

蓋し孔子の人に教ふるや、先づその大略を告げ、弟子をして詳細を類推せしむ。凡そ物には四隅あり、舉一隅とは太略で、以三隅反とは詳細を推論して相證明するのである。かゝらざる限りは端を改めて別事を教ふることはなかつた。論語里仁に曰く、

子曰參乎吾道一以貫之、曾子曰唯、子曰、門人問曰何謂也、曾子曰夫子之道忠恕而已矣、

朱子の説明に「聖人之心渾然一理而泛應曲當、用各不同、曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之、俱未知其體之一爾、夫子知其真積力久將有所得、是以呼而告之、曾子果能默契其指、即應之速而無疑也」とある即ち心印單傳師資相承の趣致を具へて、拈華微笑の一段に髣髴たるものがある。

十

唐の道林禪師は有名な碩徳である、秦望山の長松枝さし交して、恰も傘に似て居る上に踞してゐたので、時人鳥窠和尚と稱した、かの有名なる白居易樂天が杭州刺史

となつて其國に下り、禪師の道譽を聞いて、其許に詣つて佛法の大意を問うた、禪師曰く「諸惡莫作衆奉行」と、居易はかゝる簡單平易な答に接して、「三歳の孩兒でもそんな事なら言ひ得ん」と冷笑した禪師すかさず「三歳孩兒縱道得、八十老翁行不得」と、喝破したので、居易も會得する所あつたと見えて、拜謝して去つた、諸惡莫作衆善奉行、語は實に簡易であるが、意味は甚だ深長である、衆善とは、三千威儀八萬細行の義で、家庭の小より國家社會の大に及び、延いて萬有に瀾漫するものである併佛敎は理智のみを貴ぶのではない、之を體して實行しなければならぬのである、されば釋尊は多聞なりと雖も若し修行せざれば不聞に等しと云はれた、故に衆善奉行と云ふのである、孔子も「先行其言而後從之」(論語爲政)といひ「君子欲納於言而敏於行(同里仁)」といひ、又「君子恥其言之過其行也」(同憲問)と云はれたが實行は實に宗教道德の生命である。

予嘗て黒木欽堂氏を訪問した、會座に、萩野博士も居られた、欽堂氏一幅の畫を示された。披見するに、一官人樹下に於て教を老僧に請ふ圖であつた、主客筆者大雅堂の手腕の奔放自在にして、而も氣品の高奇なるを賞して止まなつた、そこで予は「先生達此畫の意味が分りか」と問うた、「否どうも分り兼ねる、一體何でせう」と反問せられた、それはかういふ譯です……宋の黃庭堅字は魯直、山谷道人と號して詩の大家である、或日黃谷寺の晦堂祖心禪師に至つて「如何是佛法嫡々大意」と問う。禪師は徐に「吾無隱爾」と答へた。此語は論語述而篇にあるので、魯直も疾くに承知して居つたから、それならば儒學にある語だといふ、禪師はそれを我が物にしなくてはいかぬと云つた魯直は成程と思つて其儘別れたが、何だか腑に落ちぬ、後山に遊びに行つて、偶岩桂(木樨)の香を嗅いで成程吾無隱爾だと頓悟した。唯知つて居るのみでは、珍味を目前に飾つて置くやうなもので何の役にも立たぬ。佛敎は勤行を貴ぶのである。

十二

相國寺の萩野獨園禪師は初め儒に志し、十八歳の時豊後の帆足萬里に學び、終に塾の都講となつた、或日塾生の爲に中庸を講じて居つたが詩云「鳶飛戾天魚躍于淵」に至り、疑團急ち起つてなかく解けぬ、乃ち閑室に黙坐して省發する所あり、遂に京に上り心華院の大拙禪師に就くこと二十年ばかり、其怒罵嗔拳下に玄微を吸盡した。

圓覺寺の今北洪川禪師は獨園禪師に比肩すべき高德であるが、初めに矢張儒者の出身で十三歳の頃藤澤東峻に教を受け、廣瀬旭莊に詞章を學び、年十八にして既に帷を大阪中島に垂れた、極めて早熟の人である常に思へらく、神儒佛各其趣は異なるけれど歸する所は一である、俗儒輩徒に章句に拘泥して居るのは、孔子の眞意を解しないのであると一日孟子浩然の章を講じ、忽ち大聲孟軻は浩然を説き、我は浩然を行すと疾呼した、後日禪門實訓を讀んで大に發憤し艶妻を捨て、大拙禪師の門に趨き、刻苦

二年一日選佛場裡に亢坐して忽然神悟した更に備前に下り、曹源寺の儀山禪師に參すること年あり、偶炊飯に當つて省悟し、其印可を得た。著はす所禪海一瀾は禪によつて儒を説いたもので、頗る藝林に傳讀せられて居る。

以上二師は儒學に満足する能はずして、去つて檀林に投じ遂に心地玲瓏の境界に達したものである道學は禪宗の刺戟によつて勃興したもの、謂はゞ本末の關係であるが究竟の心要は本店に往かなくては得られぬものと見える。

十三

翻つて考ふるに、我國宋學の大成者たる藤原惺窩も、其初は相國寺にあつて妙壽院と號した其弟子林道春も建仁寺に寓して、古澗長老の室に學んだ人である、南學の大家谷時中は、高知常眞寺僧天室(眞宗)に従學して慈沖と號し、後其寺に住持したことがある、山崎闇齋は幼時築齋で、父も制しかねて妙心寺に托し、薙髮して絶職主と號した、頗る勤勉ではあつたが、性行は少しも倭らぬので、衆議放逐に決した會

土佐公子の藻鑑を蒙つて土佐の吸江寺に移つたこと、小倉三省野中兼山の知遇を得て終に儒に歸したのである、三宅寄齋は兒島高德七世の孫で、醇儒を以て著聞した人であるが、少時大徳寺に假寓して讀書三昧に耽つたことがある、永田善齋は林道春と同じく建仁寺の古澗長老の弟子となり、詩名五山の間に喧傳した、後惺窟に師事し又道春と師友の契を結んだ人である、かの山鹿素行の如きも曾て白隱禪師に參禪したと配所殘筆に自記して居る。

之を要するに、徳川初代の儒者は、多少禪の感化を受けないものはない。その儒者が徳川家一代の思想界を指導したのである、抑も宋明の儒學は禪宗の影響によりて發達したことは、度々繰返したことがあるが、我國に程朱學や陸王學を移入したのも多くは京都五山の禪僧であつた。即ち我國近世の儒學は、初め禪僧の懷中で保育せられ徳川時代に至つて獨立するやうになつたのである故に何と云つても禪的氣習は擺脫するとは出來ぬことと思ふ、南禪寺の岐陽方秀禪師の如きは、儒釋不二を主張したのを

見ても分かる。

十四

かくの如く室町時代では、儒佛一途であつたのであるが、其間に佛敎界に幾多の弊害が起つて漸く其權威を失ひ、徳川時代に至つては、新興の儒學のために壓倒せられて了つた、謂はゞ本家が養子に取られたやうなものである。それで儒佛二途となり、年所を経るの久しき、世人は兩者の關係を忘却し、儒者も亦所學に守株膠柱して、甚しきは佛敎を敵視排撃するに至つた。乍併冷靜に我儒學發達の經路を考覈したならば、必ずや昨非今是を悟るであらう、攝津の人森尙謙字は利涉儼塾と號す、少にして福住道祐松永昌易に儒を學び、長じて京都江戸に遊ぶこと七八年、業大に進み、遂に水戸義公に辟されて國史編修の事に與り、安積澹泊と親交を訂した、尙謙頗る多能にして、特に佛敎に至つては造詣する所深厚であつて、別に不染居士と號して、其著護法資治論十卷、儒佛並存して相悖らざる所以を尙論して餘蘊なし、澹泊痛く之を斥

けて、屢切諫したけれども、尙謙は斷乎として聽かなかつた、然るにその澹泊が別號老牛居士と云つたのは可笑しいでないか。予嘗て、三島中洲博士の講演を聞いたことがある、博士曰く、他の學派や宗教と雖も漫りに排斥すべきでない、儒説と合するものあらば、攝取して補足せねばならぬと。予は其雅量に推服して居る。世人刻舟の陋見を去り、活眼を開いて博く涉獵するならば、發明するところ鮮少ではあるまいと思ふ。

生死 透脫 禪と武士道 終

大正五年九月一日印刷  
大正五年九月三日發行

禪門叢書第八編

定價金壹圓

著者	横尾賢宗
發行者	高島大圓
印刷者	東京市小石川區原町六番地 佐久間衡治
印刷所	東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社 秀英舍



發行所

東京市小石川區原町六番地  
振替口座東京一五六八六  
電話番町二六〇八

丙午出版社

# 大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文教に貢献せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を傾はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の繰讀に便に内容は處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 文學博士三宅雪嶺先生著(定價五錢郵稅八錢) **第一編 明治思想小史**
- 文學士沼波環音先生著(定價七十錢郵稅八錢) **第二編 此 一 筋**
- 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢) **第三編 來世の有無**
- 大内青巒先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第四編 禪の極致**
- 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第五編 予が婦人觀**
- 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第六編 狐禪狸詩**
- 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第七編 噴 火 口**
- 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第八編 ひとみの旅**
- 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第九編 書 窓 車 窓**
- シヨウ原著堺利彦先生譯(定價六十錢郵稅八錢) **第十編 人と超人**
- 文學博士村上專精先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第十一編 六十一年**
- 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第十二編 沈黙の饒舌**

井上哲次郎博士序 橋惠勝先生新著

定價金一圓廿錢 郵稅金八錢

著者は佛教の研究に於て一家の見を樹てたる篤學の士にしてその論斷往々にして先人未到の境に入る本書は多年研究の結果に基き西洋の心理學以外別に佛教心理學の可能を論定し彼此對照以て佛教心理の微を聞き細を穿つ今此の新研究の發表は蓋し學界の幸慶ならずとせず

東洋大學教授 境野黃洋先生新著

定價金一圓三十錢 郵稅金八錢

觀察の發見と論斷の明快とを以て佛教史界の權威たる著者が偉大なる史筆を揮つて印度支那日本の佛教が過去三千年間に於ける重要な問題十有數條を研究してこれに快刀亂麻を斷つ結論を與ふ殊に「正確なる事實に基いて自分の立場を定めると同時にどこまでも佛教宣傳の精神を離れざらん所」著者の功に誇りとする所にして又最も尊重すべき態度なりとす

東洋大學教授 加藤咄堂先生新著

定價金八拾錢 郵稅金八錢

吾等一個の戰士として社會に立つや其の生活は命懸にして其の處世は眞劍勝負なり一步を過れば喪身失命忽ち人生の劣敗者たらざるを得ず本書は兩刃相交はるの中に秘術を盡すの劍を説くと共に生死岸頭に自在を得るの禪を語る劍客の逸話禪僧の垂示此の劍禪一味のところ直にこれ處世の要訣生活の妙諦事異なりと雖も道は一一讀して趣味全巻に横溢し教訓編中に滿つるを覺るべし

西川光次郎先生新著

定價金八錢 郵稅金八錢

著者は現代行はるゝところの最新の強健法及治療法に關し、久しく研究を重ねたりしが、今やその中につき、最も有効なりと信ずる、岡田式靜坐法、二木式深呼吸法、藤田式息心調和法、高野式抵抗養生法、川合式強健術、葛田式運動療法、井上伸子の筋骨矯正術、小森式整骨療法、石塚式食養法、川面式體育法、アドルフ・ジャストの土の利用法、ニツプの水の利用法、歐米諸大家の日光療法、各種心理療法等について、その方法と特効とを詳説せり、世の身體虛弱なる人、疾病に悩む人、一度、本書を讀みば、疑念、萬病驅ひ來らむも、敢然としてこれを驅退するの力を獲得せむ。

「萬朝報」記者 大住晴風先生著  
**現代思想講話**

定價金 一圓廿錢  
郵税金 八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由来せる傳説を究め通んでせしむるを要す。ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す。若し此等頭學の著作の全體に精微の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へたりて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす。此にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士 久津見藤村先生著  
**現代八面鋒**

定價金 八拾錢  
郵税金 八錢

物平を得ざれば則ち鳴る。而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り敢し十方に喝破す。その鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍寶

暮村隱士 久津見藤村先生著  
**眞人偽人**

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次。聊か瘡癥を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論筆鋒その評深淵洵に筆端風を生じて文に聲あるの慨あり

堺利彦先生著  
**樂天囚人**

定價金 六拾錢  
郵税金 六錢

此書は狂暴、不平、愚悞、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文集

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

藝文之類 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短論落奇抜痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す 五、逆徒の古風 六、子への夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇「谷川の水」(バーナード、シウ原作) 第四編 一、告白 第二編 二、クレンクビニ、大杉榮 三、叛徒人耶蘇、高島素之 第四編 二、叛徒人耶蘇、高島素之

堺利彦先生著  
**赤裸の人**

定價金 九拾錢  
郵税金 八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる。波瀾重疊神出鬼没の彼が生誕は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし。今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは逸論節文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感と起さしむ

カウツキ先生原著  
堺利彦先生譯  
**社會主義倫理學**

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

哲學界には逸妻にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本館主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらる。今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の眼を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり。著者カウツキは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらる。人の日本の界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章  
**基督抹殺論**

定價金 七十錢  
郵税金 八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も興つて天地の容れざる大道無道を金て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ。其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一卷を著す所論痛絶快絶行文雄辯絶倫嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに及びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憤慨を興ふ

文學士 渡邊又次郎先生著  
**最新論理學**

定價金一圓廿錢  
郵稅拾貳錢

本書は哲學の華斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に通ぐるものなかるべし

加藤鳴堂先生著  
**筆と舌**

定價金七十錢  
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實際談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序  
藤井瑞枝女士著  
**亂れ雲**

定價金八十錢  
郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宜正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁圓刺軟調皮肉或は鋭き觀察或は隠れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脱なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者  
伊藤聖信先生著  
**新氣運**

定價金八十錢  
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の眞實嘲笑輕侮感の中に立ち臨面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの

三宅雲嶺先生序  
高島米峯先生著  
**廣長舌**

定價金七十錢  
郵稅金八錢

加藤鳴堂先生曰はく「米峯今胸中鬱物の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を透して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ益々當世の大文章」と

加藤弘之先生序  
高島米峯先生著  
**惡戰**

定價金八十錢  
郵稅金八錢

著者曰はく「これ備が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく職なく疎に加ふるに資金なく後援なき採一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に費する處なきを保證するべし」と

島田三郎先生序  
高島米峯先生著  
**理想的商業**

定價金二十五錢  
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客成張つて商人尻こ盡れること益だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

前外務大臣伯爵林董閣下序  
東北大學總長  
澤柳政太郎先生序  
千河岸實一先生著  
**修養史**

定價金壹圓  
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を讀くに古今東西の史乘より異世同職の事實二百對を擧げたる者にして數冊これを用るば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と



<p>約外務大臣 伯賢 林 重閣下 纂譯</p> <p><b>修養の模範</b></p> <p>定價金七拾錢 郵税金八錢</p>	<p>文學博士 村上專精先生著</p> <p><b>俗修養論</b></p> <p>定價金四圓 郵税金八錢</p>	<p>文學博士 村上專精先生著</p> <p>改訂自 <b>信錄</b></p> <p>定價金六拾錢 郵税金八錢</p>	<p>文學博士 村上專精先生著</p> <p><b>誠のしるべ</b></p> <p>定價金四拾錢 郵税金八錢</p>
<p>家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する英譯の乏しいのに窮り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを嘆いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である</p>	<p>古聖賢の芳蹟を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを採引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美談は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ新界未だあらざる精到究備の修養書たらむなり</p>	<p>これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし</p>	<p>誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根柢の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその餘る所以を評記せらるる苟も誠を得得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め</p>

<p>文學博士 村上專精先生著</p> <p><b>女性訓</b></p> <p>定價金四十錢 郵税金六錢</p>	<p>スタンフォード大學校長 ジョージ・ホルマン博士原著 マスター・オブ・アーツ 中村 平先生譯</p> <p><b>人物の修養</b></p> <p>定價金五十錢 郵税金八錢</p>	<p>ウキリヤム、ハイド氏原著 鈴木秀太郎先生譯補</p> <p><b>自己測量</b></p> <p>定價金五十錢 郵税金八錢</p>	<p>黒岩周六先生講演</p> <p><b>人生問題</b></p> <p>定價金七拾錢 郵税金八錢</p>
<p>本書の内容は天職中庸實業禮節操の五調を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり</p>	<p>澤野前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く「ジョージ・ホルマン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるる紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と</p>	<p>これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の肥術法に成れる名著なり今移して以てこれを我が邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年婦等がこの生活雜の世に處して新しき運命の驛庫を開くべき鍵はこゝにあり</p>	<p>人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に開着することを得ん</p>

**退耕錄**  
 東北大學總長  
 澤柳政太郎先生著  
 定價金壹圓  
 郵税金八錢

**死後の生活**  
 フエヒネル先生原著  
 文學博士 平田元吉先生譯  
 定價金五拾錢  
 郵税金八錢

**強肺病全快術と肺病全快談**  
 杉村農機先生譯編  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

**南半球五萬哩**  
 文學博士 井上圓了先生著  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歴上百級の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを觀察あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり發達にして透徹せしるるも時勢に阿らず誠に愛國愛世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

本書は現世の事實を基とし最高の時的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる時と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼西遊等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は觀愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を興ち又學者研究者に豐富なる暗示刺激を興ふるや疑ふ可からず

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を讀んで天來の福音に接せよ

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺餘なし挿畫五十餘上更に花を添ふ

**活佛教**  
 文學博士 井上圓了先生著  
 定價金壹圓拾錢  
 郵税金八錢

**佛教國民の理想**  
 帝國大學教授 高楠順次郎先生著  
 文學博士 羽溪了諦先生譯  
 定價金一圓廿錢  
 郵税金八錢

**釋尊の研究**  
 文學博士 松本文三郎先生著  
 文學博士 羽溪了諦先生譯  
 定價金壹圓  
 郵税金八錢

**彌勒淨土論**  
 京都帝國大學教授 松本文三郎先生著  
 文學博士 松本文三郎先生著  
 定價金壹圓  
 郵税金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの福音

本書は國民の理想宗教の理想人格の理想を闡明したる快著也第一篇は會て公にしたる「國民と宗教」にして國民の地位を自覺せしめんが爲に國民性を中心として信仰と修養とを説き第二篇は新に試みたる「佛教の地位」にして人格の理想を自覺せしめんが爲に佛教を中心としてその信仰に生命を附與し實生活に於ける眞宗教の地位を明にし第三篇「久修十題」は研究と修養とに關する諸問題を解説せり敢て輕浮なる現代の傾向を快しとせざる人士の精讀を切望す

本書筆を釋尊以前の婆羅門敎の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して許に涅槃の意義を解し具に東西學者の議論を破る誠に敎界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

宗敎學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土」の思想なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大根事ならざるや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より一彌勒淨土の由來淵源を詳論し博士の舊著「極樂淨土論」と相待つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

ポーランド、ケールラス先生著  
 阿彌陀佛  
 (品切) 定價金三十五錢  
 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛敎の根本問題也ケールラス博士その彩筆を揮ひ  
 殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好  
 評噴々たることや弊社曩に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる  
 大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶  
 ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師  
 文學士 常盤大定先生著  
 釋迦牟尼傳  
 (品切) 定價金七十錢  
 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺し  
 て顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見  
 ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等  
 の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩派の相違を比較對照し以  
 て此の千古の大釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著  
 孔子傳  
 定價金壹圓四十錢  
 郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその  
 論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未  
 實の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足  
 るところ

高等師範學校講師  
 且理章三郎先生著  
 王陽明  
 定價金一圓五十錢  
 郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲  
 觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百穀の問題を解決し盡くして遂に悟  
 徹の妙境に入る豈僅ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の  
 實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しか  
 の歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師  
 堀野實洋先生著  
 聖德太子傳  
 定價金五十五錢  
 郵税金八錢

佛敎史家として夙に名ある堀野先生が其の熟練なる史眼と同感せる文  
 才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛敎の教主たる聖德太子の尊嚴を  
 叙述し併て當時社會の政敎習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明  
 快簡潔の適實に他に其の匹を見ざる所

大内青野先生序  
 高島米峰先生著  
 一休和尚傳  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

元日に朝儀を振廻はして人の度胸を抜き末期に養を嗜つて梵天に捧げた  
 彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうとも  
 せず一雲一笠ただ平民的敎化のために一生を送つた彼一休翁か狂かかはた  
 一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授  
 船橋谷快天先生著  
 達磨と陽明  
 定價金壹圓拾錢  
 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼  
 目を豁開して餘蘊なく達磨の工夫修養の方法爲學の用心精神練磨人格發  
 成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳  
 の指導者たり

明楊起元評註  
 加藤明堂先生和譯  
 和譯維摩經評註  
 定價金七十錢  
 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明した  
 るものを更に加藤明堂先生が平明暢達な文を以て之を和譯し佛圖を附し  
 て通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び譯を讀せむと欲する者には  
 勿論講習本として亦最も適當なり

**加藤 唯堂先生著**  
**原人論講話**  
 定價金六十錢  
 郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の巋然一頭地を  
 抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通  
 俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批  
 評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生  
 問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

**加藤 唯堂先生著**  
**通俗講話の理方法**  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

通俗教育の必要日に通りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書  
 は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講  
 話して聴者を感動せしめ得べきかの理論と方法を極めて親切に解説し  
 多くの例話を擧げてその使用法を示されたものなれば教化の秘訣難辯  
 の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り荷も講壇に立たむと欲する人一  
 たび本書を繕かむか念にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

**東洋大學講師 澤先生著**  
**寒山詩新釋**  
 定價金五十錢  
 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ國  
 語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり  
 千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一  
 筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩を知らんと欲するものは須  
 らく此書を以て指南車となすべし

**東洋大學講師 澤先生著**  
**和漢名詩新釋**  
 定價金五十錢  
 郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後絶海義堂に至る大  
 凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの  
 典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れ  
 に悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩  
 篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

**慶應義塾大學教授 越谷快天先生評釋**  
**和名士參禪集**  
 定價金壹圓  
 郵税金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の遷都より北條時頼北  
 條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の  
 宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡葉休等の  
 碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批  
 評を加へ學道の正路を示し在家參禪の實徑に供する者にして讀者をして  
 坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名醫大德の饋饌に接するを得しむ

**マクス、ミユラー博士原著**  
**宗教學綱要**  
 定價金五十五錢  
 郵税金八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マ  
 フクス、ミユラー博士の原著を譯本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを  
 補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良  
 書なり

**第三高等學校教授 文學士野々村直太郎先生著**  
**宗教と倫理**  
 定價金五十錢  
 郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり爾してまた實に人生問題最後の解決  
 書なり世の靈と肉との饑渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若  
 しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安  
 樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗教論を評す

**眞宗補敎 北條蓮華先生著**  
**眞宗の教義**  
 定價金十二圓  
 郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は  
 博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中  
 心とし其師法然上人と其實蓮如上人との教義を信仰上より研究したる結  
 果を組織的に叙述したる者なり他力敎の秘奥を深り本願寺の盛なる所以  
 を知らむとする者の必讀を冀ふ

帝國大學講師 荻原雲來先生新著  
**實習梵語學**  
 定價一圓七十錢  
 郵税金八錢

文學博士 高楠順次郎先生選  
 曹洞宗大學教授  
**巴利語文典**  
 定價一圓八十錢  
 郵税金八錢

慈雲尊者 眞筆  
 高楠順次郎先生序  
 阿彌得壽先生著  
**悉曇阿彌陀經**  
 定價一圓八十錢  
 郵税金八錢

平子鐸嶺先生遺著  
**補校法上聖德證註**  
 定價一圓  
 郵税金八錢

佛敎を學ばむとするものは言ふまでもなし印度の文學美術を研究せむとするものも亦梵字梵語を知ることなくしては常に霞を隔てて花を觀るの憾なくはあらずしかも邦人にこれに慨き邦語を以てこれに解せむことか努力するもの實に十數年而して今や漸く邦語を成る自今以後英字母二十六を讀み得る程の人は容易に梵字梵語に通達し得べし殊に悉曇十八章を學んで大に天下に誇示するに足るの事業たり

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に従ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ばんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

「上宮聖德法王帝說」はその記事切實その文詞醇古多く專業已往の記録を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須む先人未だの見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史眼犀利檢査先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ隠れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生選  
**科註原人論**  
 定價十二圓  
 郵税金二圓  
**科註大乘起信論**  
 定價十六圓  
 郵税金二圓

高島米峰先生著  
**洋史**  
 定價十三圓  
 郵税金二圓

文學博士 三宅雪嶺先生著  
**偉人の跡**  
 定價八圓  
 郵税金八錢

文學博士 三宅雪嶺先生著  
**小泡十種**  
 定價四十五圓  
 郵税金八錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の購本として最も適當なり

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を賣くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて樂はざるなり」と

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明に才製察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として技に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後如何に遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

博士の學殖富麗に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩瀚盡きざる大河となり敢ては續紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快書也

文學博士 三宅雪嶺先生著

### 明治思想小史

定價金五十錢  
郵税金六錢

文學士 沼波瑛音先生著

### 此筋

定價金七十錢  
郵税金八錢

新佛教徒同志會編

### 來世之有無

定價金七十錢  
郵税金八錢

高島米峰先生著

### 現代青年論

(品切) 定價金十五錢  
郵税金二錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生や思想の最高境に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深淵の觀察を逞しうして劉切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大発展が果して如何なる思想の叢物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これに大正國民必讀の書

現時佛壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうなる方にのみ、これを信む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがらるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し  
一、青年の力  
二、今の青年は依頼心が強い  
三、今の青年には氣概がない  
四、今の青年は成功を急ぐ  
五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する  
六、今の青年は思想が羸弱である  
七、今の青年は信仰が乏しい  
八、今の青年は同情が乏しい

### 禪の極致

大内青巒先生著  
結城素明 齋伯 齋齋  
定價金六十錢  
郵税金八錢

黑岩周六先生著

### 予が婦人觀

定價金六十錢  
郵税金八錢

釋 清 潭先生著

### 狐禪狸詩

定價金六十錢  
郵税金八錢

文學博士 村上專精先生新著

### 眞宗全史

定價金三十圓  
郵税金十六錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を説くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々迷はしむることを。大内先生學深く徳高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を説き、深遠の法を語ることに、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位頌講話」また先生獨創の見識を以て、縦横に講解す、蓋近來の大文字なり

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠窟詩の窟一駭して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしとそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

本書は堅に古今を貫き、横に十派に涉り、奈良、平安の古に於ける淨土教の起原よりして、明治、大正の佛教の現狀に及び異説異傳を取捨して系統脈絡を分明にし、傳教、慈覺、空也、源信、良忍、覺鑒、法然、親鸞、蓮如、其他諸上人の事蹟は固より、東西本願寺其他本山諸寺の變遷關係等に至るまで、一目の下に之を瞭然たらしむ殊に明治以後に於ける佛教界の情勢を通觀すべき何等の著述なき今日著者は其點に於て、多大なる寄與貢獻を爲せり、廢佛毀釋の問題の如き其の主要なる者の一なりとす

釋清潭先生主筆  
月刊漢詩  
一年分五十五錢

釋清潭先生を中心とする漢詩圖説社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す  
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著

晚晴樓文鈔  
定價金八十五錢  
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを愛ふるを須むざるなり殊に明治時代の碩學文章辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す餘餘深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序  
高島米峯先生著

噴火口  
定價金八十錢  
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに響となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を餘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著「廣長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆

月刊人道講話  
一年分一圓九錢  
一年分一圓四錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者  
「人道講話」は教育と宗教と道徳との三面を有す  
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす  
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要務とす  
「人道講話」は父母の孝養を以て道徳の大本とす

記者松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士  
月刊藝文  
一年分一圓廿二錢  
一年分一圓廿錢

「藝文」は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也  
「藝文」は東西兩洋の學術文藝に對し最嚴深淵の批判を下さむとする者也  
「藝文」は關西思想界の中心として發て關東の思想界を風靡せむとする者也

「東京朝日」記者  
杉村巷人冠先生著

ひとみの旅  
定價金六十錢  
郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。會て、落陽の紙價を貴からしめたる「大英遊記」以來の名文にして、又會て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる「七花八裂」以來の奇著なり。

加藤明堂先生著  
書窓車窓

定價金六十錢  
郵税金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の徳澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出ては車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授鈴木大拙先生著  
帝國大學講師鈴木大拙先生著  
スエデンボルグ  
定價金五十錢  
郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の通歴者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、田舎脫離の高士、之を一身を集めたるスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

文學博士村上專精先生著  
**六十年**  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

これ村上博士が過去六十年間苦悶の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士松本文三郎先生著  
**佛典の研究**  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリティー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに最近幾種その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見廣村先生著  
**ニイチエ**  
 定價金九十錢  
 郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其熾熱の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士松本文三郎先生著  
**宗教と哲學**  
 定價金七十錢  
 郵税金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と道徳」「研究と信仰」等次第を返うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授土屋鳳洲先生編  
**唐宋八家文鈔**  
 定價金四十五錢  
 郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな巻帙浩濶初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺傳となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師鈴木大拙先生著  
**禪の第一義**  
 定價金一圓  
 郵税金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を説述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實際の歷程を精叙しその所得の公案を解説し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除くせむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代的色彩の顯る鮮なるものあるを看取し得む

内田魯庵先生著  
**沈黙の饒舌**  
 定價金八十錢  
 郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老練内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその旨の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著  
**新エルサレム**  
 定價金六十錢  
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著



人 と 超 人

定價金九十錢  
郵税金八錢

ベアトリアンノ著作 櫻利彦先生譯  
レウウ盤全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼の生命哲學彼の兩性靈破の皮肉彼の風刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り  
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、レウウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が曾教て見た人と超人(松尾松葉)等あり

おばけの正體

定價金五十錢  
郵税金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者怪しい者懐しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の真相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聽きたがる小供のためにも「幽霊の正體見たり枯尾花」など、悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを興へること多大である

青 樹 禪 話

定價金四十錢  
郵税金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを成す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る透悟凡塵の如きまじ讀者の標ぶところに委するのみ

印度哲學宗教史

定價金八十錢  
郵税金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を増補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵、佛、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を説述して盡さざるなきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘鑰を握らざるべからざる也

修 道 禪 話

定價金一圓  
郵税金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に満足し邪禪に墮在するもの紛からざるを見て慈心到底黙止するに堪へず茲に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不説の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始りて了了明明

神 智 と 神 愛

定價金一圓半錢  
郵税金十二錢

本書は天界地獄の遍歴者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を串直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹輝耀明快

店 頭 禪

定價金八十錢  
郵税金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鶻聲堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實證也信仰の告白也

禪 の 面 目

定價金一圓  
郵税金八錢

語も亦曾の如く默も亦曾の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默曾禪話』二卷數百則中より奇峭の論と慧到の説とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

「修養世界」主筆 菅原潤禪師著  
禪林奇行

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古  
聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛國の行履證跡を  
禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

釋宗演老師著  
拈華微笑

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

釋宗拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する  
者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如  
の境地は畢竟此書を必讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしと  
なす耳

京都市平安中學講師  
トーマス、カービー先生著  
英文佛教讀本

定價金 五十錢  
郵税金 六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推  
重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播  
に盡し、狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に翻譯せ  
られたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著  
者の意見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の  
良書たり

帝國大學講師 萩原靈來先生著  
佛漢佛教辭典

定價金 五十圓  
郵税金 十二錢

本書收むる所顯密二教の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛  
菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器量數方時より動調調詞に至るま  
で語數甚だ豊富にして單に佛教辭典としてのみならず又梵漢辭典とし  
て未曾有の寶藏なりこれを以て佛教を知らむと欲するもの梵語を學ば  
むと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取  
ても亦唯一無二の寶典なり

曹洞大學長 秋野孝道老師著  
禪の骨髓

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこに何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老  
師特に「禪の骨髓」と題して一卷を成す或は言はむは是れ好肉上の禪と  
易ぞ知らむは是れ指月の指なることを世の指に執着するものは則ち去れ  
迷雲一たび拂へば眞如の明月秋々として天地こゝに朗然これ此書を學  
人に薦むる所以

原僧選老師著  
禪の捷徑

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

教外別傳と説き不立文字と説き而して實參實究を強ふ禪も亦難やかな  
易ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなき  
を果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるもの  
ぞ僧選老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今其心默止し  
難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるもの  
あらむ

荒井漢光先生著  
道元禪師

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕道尋師し深く佛院所説の核  
心を探り詳に祖師面授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手還鄉」  
と空手還鄉の那一曲知らず何等の妙調ぞ佛法の要旨技に存し禪の眞髓  
技に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙な  
る文辭を以てし禪師の風采面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文  
學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪  
風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

原田祖岳先生著  
參禪の階梯

定價金 壹圓  
郵税金 八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の  
禪に姑く階梯を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡亂に大悟  
を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荆棘  
林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然た  
る階梯を辿れ

大石正巳君序 飯田權隱君跋  
南天棒禪話  
定價金一圓廿錢  
郵税金八錢

東洋大學教授 境野黃洋先生著  
活ける宗教  
定價金壹圓廿錢  
郵税金八錢

醫學博士 岡島狂花先生新著  
現代の西洋繪畫  
定價金一圓六十錢  
郵税金十二錢

加藤咄堂先生 推諒 箇岡清泉先生著  
美人禪  
定價金一圓  
郵税金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今者はすところの禪話一卷巻中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縦横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり

著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛教の代表的偉人中特に親聖太子運如上人弘法大師法然上人日蓮上人の叙したるもの正にこれ一部の人間的な血の通つて居る生活の精に有りふれた冷かな抽象的な人間の氣の通つて居る生活の精に有る眞の宗教の信仰も理會せられるこれによつて佛教の大意もわかるして健全なる佛教の信仰も理會せられる

岡島博士多年研究の所得を組織して茲に此の書を成すその内容の概略を摘記せむか。一、代表的な畫三十二葉を挿入したる事二、從來ありふれたる氣分の斷片的文集を取扱ひたる事三、科學的の著作なる事四、現代西洋十六ヶ國の繪畫を取扱ひたる事五、筆を太古の繪畫史に起し古き傾向よりの推移期に入り進みて新しき傾向即ち印象派、新印象派、後期印象派、未來派、色彩派、抽象派、立體派、立體派より昨年分れたるオルフェイムに至るまで悉く精緻に盡き立てる事六、現代の版畫を七節に分ち廣告畫にまで論及したる事

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の支機を語る文に艶治の趣ありて想に超脱の旨を存す孰れか禪執れか戀「美人禪」の一書讀み了りて轉々洗滌たり」と高島米峯先生曰はく「建禮別傳の妙教理不立の好文字たることを看取し色即空なる」と高島米峯先生曰はく「建禮別傳の妙教理不立の好文字たることを看取し色即空なる」と

帝國大學教授 高楠順次郎先生開  
帝國大學講師文學士 木村泰賢新著  
印度六派哲學  
定價金二圓卅錢  
郵税金十二錢

スエデンボルグ著 鈴木大拙先生譯  
神慮論  
定價金二圓卅錢  
郵税金十二錢

建仁寺管長 竹田默齋老師著  
禪機  
定價金一圓  
郵税金八錢

高橋竹送先生新著  
隱元・木庵・即非  
定價金一圓  
郵税金八錢

六派哲學(數論、論、勝論、正理論、聲論、吠檀多)は印度哲學の代表的思潮にして諸國の論議と學說と一として備はらずと言ふことなし然るに我國未だ之に關して權威ある著述の發表せられたるを聞かざるは眞に學界の一大耻辱なりとす木村先生夙に之を慨し研究多年其間又多少の補訂を加へて遂に東京帝國大學に於て之を講ずること二年恰もタゴールによつて今更に如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆するべき名者を推薦することを得たるは實に弊社の誇りのみならず也

「神慮論」はスエデンボルグが支那神祕なる宗教を知るべき一大著述なり「天界と地獄」は現世と離れざる心界を描出し「神智と神愛」は絶対無限性の神徳を説破し而して「神慮論」は實に此の神徳が萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遍歴者神祕界の大王神學界の革命家たるス氏の所説を知らむと欲する者は本書を讀め

不言言の妙諦言ひ得て盡さざるなく不説説の眞源説き得て盡らざるなしその舌鋒鋭利互に人間の皮肉を刺し肺腑を刺る正にこれ眞禪機の暴露

著者今流麗なる筆を呵して夙に黃檗三筆の稱ある隱元三禪師の哀怨なる生涯類脫なる言行書畫風流の三昧を描寫し以て明朝滅亡史を背景として江戸時代佛教の活舞臺に躍り出でたる黃檗禪の眞面目を傳ふ蓋し禪界最初の著作たり

文學博士 井上圓了先生著  
**妖怪叢書**

井上先生の妖怪研究に於ける殆ど半生の事業たりこれを以てその妖怪傳の正體を暴露し來つて遂に眞怪の不可思議を闡明するところ誠に天下獨歩にして何人の追隨をも許さざるなり或は「哲學うらなひ」といひ或は「改良新案の夢」といひ或は「天狗論」といひ或は「迷信解」といふ悉くこれは先生の遺著を傾けたるものならざるなし今この四論を合せて此の叢書完成す世の奇を好む人怪を厭ふ人共に本書に就いてその眞相を看取せば庶幾くば直に無不思議の妙境に到達し得む

臨濟大學教授 士木宮泰彦先生新著  
**榮西禪師**

鎌倉足利時代の文化（文學、建築、繪畫、書道、香道、茶道）は一として當時傳來せる禪宗の影響を蒙らざるはなく殊に我國禪宗の始祖たる榮西禪師の偉業海嶽の如き者あり著者今多年の研究によりてその行狀事業著述及び法嗣の事蹟を詳述し以て鎌倉足利時代の文化を大正の今日に展開し來る單に一禪僧の傳記のみとしてこれを輕々に看過すること勿れ

帝國大學講師 鈴木大拙先生新著  
**禪の研究**

著者義に「禪の第一義」を著はして參禪辨道の上一路の新光明を與へたりしが今やその研究更に百尺竿頭一步を進め茲にこの新著を發表して從來の空疎なる談片禪語禪の外に別に充實せる系統禪科學の存することを明にして修禪の目的人生の歸趣始めてこゝに確立する所以を力説す洵にこれ禪界空前の新研究なり

臺山大學長 權田雷斧先生正述  
**兩曼茶羅通解**

兩部曼茶羅は密教の根本思想とその實踐の理想とを圖畫に託して顯示したるものにして密教の骨髄眞言の極致佛敎美術の精華これを外にして求むべからざるなり然るに斯教由來口訣を傳へず堅く神祕の關鎖を鎖して容易に門外の窺を許さず學者頗るこれを遺憾とす於此乎昨秋有志相謀り大阿闍梨權田雷斧先生を請じて曼茶羅の講傳を受く弊社今切にその講録の修正補訂を請ひ茲にこの千古の秘藏を開放するの光榮を得たり學界の慶事と言はずして何ぞや

定價金一圓五錢  
郵税金八錢

定價金一圓  
郵税金八錢

定價金一圓  
郵税金八錢

定價金一圓五錢  
郵税金八錢

325  
378y

終

